

## 第6章 総括と展望

### 1 福島城跡

今回の調査はこれまで調査の手が及んでいなかった内郭部を中心に行ったが、残念ながら出土遺物がきわめて少なく、また調査区も狭いものに留まったため、内郭部の全貌の解明には至らなかった。しかし、出土遺物の年代観や、その構造が古代城柵をモデルとしながら中世城郭的要素を備えることなど、これまでの成果を総合的に考察すると、福島城が10世紀後半～11世紀の築造である可能性が強くなったと言ってよいだろう。

福島城については、規模の大きさと共に、その立地も注目される。福島城は、直接十三湖に臨み、日本海と岩木川水系によって結ばれた津軽平野を掌握する位置に存在する。このことから、十三湊成立に先立つこの時期に水運・海運といった水系で結ばれた大きな政治勢力の形成が浮かび上がってくる。しかもそうした立地は、律令国家の勢力が東北に入った際、主要河川の河口部に城柵を築き、押さえながら北進した状況とも重なっていた。

三浦圭介の説くように、10世紀後半～11世紀にかけて、東北部地域は北海道とも連動して、生産・流通構造が飛躍し、まとまりのある文化圏を形成していた。例えば、五所ヶ原の窯跡群で生産された須恵器は北海道までもたらされており、同時期に操業したとみられる製鉄遺跡群も、それらの流通圏の存在抜きには考え難い。このような考古学的に確認された多くの物資の往来は、津軽海峡を挟んだ交易や人の活発な交流を証明しているであろう。河川交通・海上交通の掌握は肝要であったのであり、福島城の立地もこれら岩木川、十三湖、日本海域を結ぶ水系を背景に理解しなければならない。

その一方でこの時期は、蓬田大館、中里館、北海道松前町の原口館に代表されるような、堀を巡らした防御集落が一斉に現れ、政治・軍事的に緊張した時期でもあった。遠藤巖が説くように、王朝国家期の東北部支配は、蝦夷融和策を掲げつつ、鎮守府胆沢城と秋田城に俘囚長を有力在庁としておき、奥地の夷狄を分断して支配することにあつた。そして10世紀後半以降の王朝国家側の蝦夷の人々に対する異民族視が強まる中で、考古学的にも把握できる独自の文化形成が促進された。

そうした中で岩木川・十三湖水系を押さえ、日本海に直結したこの地に、これほど大規模な城郭が築かれた意味はきわめて重い。蝦夷の政治集団が水系ごとのまとまりをもったことは佐藤信によっても指摘されているが、福島城は10世紀後半～11世紀にかけて安藤氏の前身勢力ともいえる、岩木川・十三湖水系の大きな政治集団の中心拠点として機能したと位置づけることが可能だろう。

具体的にそれがどのようなものであったかを追求することは、今後の課題である。それには文献資料側からの再検討と、なにより福島城の継続的な考古学的調査が必要である。内郭部の内部の調査や外郭部の要点の調査が、まず期待されよう。外郭土塁と堀の構造把握と築造年代の厳密な比定も待たれる。

大規模に進められた植林などによって、調査環境は一時より悪くなっているが、それでも遺跡の大部分は完全な状態で残され、宅地も存在しない。将来的に計画的な調査と整備を推進するための条件は十二分に整っていると言うことができる。 (千田)

**参考文献**

国立歴史民俗博物館編 1994 『中世都市十三湊と安藤氏』新人物往来社。